

次は幸福..



次は幸福 - -

あの時の私たち、お互いに自分を見ていたのかもしれないわね。ほら、人よりつらいことが沢山ある人は、人よりも沢山やさしくなれるって、誰かが言ってたじゃない。

ふるさとに帰ってきた春子は、遠い昔の高校生の時の出来事に出会います。

そして、思いがけない優しい言葉に出会います。誰もが忘れてしまう遠い思い出に出会える電車、これはそんな戯曲。

「次は幸福……」

春子 30歳

保男 28歳

電車男と呼ばれる青年

地方鉄道の列車内、車内はすでに暗く春子が座席に座ってぼんやりと夕暮れの景色を見ている。

車掌（保男）が入ってくる。

保男 （春子に）すみません。切符を拝見できますか。

春子 （切符を出し、保男を見つめて）。

保男 ありがとうございます。次は橋本、橋本。降りる

方はお忘れものがないように支度をしてください。

春子 思い出したわ。あなた保男君でしょう。

保男 え、

春子 やっぱり、そうだわ。私いつも電車で一緒だった、

保男 あなたは。

春子 思い出した。（笑いながら）驚いたわ。あなた車掌

さんになったの。そうだ、この電車だった、いつも乗っ

てたの。何年ぶりかしら。

保男 帰って来たんですか。

春子 ううん。帰るたって、私の家なんか何処にもない。

保男 ああ、ご旅行ですね。

春子 ご旅行というのも変ね。橋本は私のふるさとだもん

ね。やっぱり帰ってきたんだ。

保男 ふるさと。そうですね。

春子 可笑しいわ。私あなたの言ったことであっぺんにあ

あ、ふるさとなんだと思っただわ。

保男 何がですか。

春子 「次は橋本、橋本」

保男 。

春子 あの頃もやってたわね。同じこの電車で。。

青年が隣の車両から入ってくる。身体は大きいが常人の足取りではなく少しうつろな様子。突然……

青年 次は橋本、橋本、降りる方は支度をして下さい。

驚く春子の前を、青年は通り過ぎようとす。

春子 車掌さん。橋本には何時に着くんですか。

青年 (驚いて) ええ、はい、19時45分です。

春子 (笑いかけながら) どうも、ありがとう。

青年 どうもありがとうございます。

青年はうれしそうに車両から出ていく。

保男 彼はね電車男と呼ばれているんです。いつもああして僕のまねをして。でも今夜は眠れないかもしれない。

春子 どうして。

保男 誰も彼に声をかける人なんかいなかったですよ。みんな少し気味悪がって。

春子 そうなの。

保男 それもあなたのようなきれいな人に。

春子 たぶん、私ね今普通じゃない。誰にでも、どんな人にも出来るだけ優しくしたい気持ちなの。

保男 (思い出すように) そうだ、あの時も同じことを言いましたね。

溶暗して回想シーンに。

十二年前、夜、春子の家の前だが、あたりは暗く何も見えない。暗がりの中に保男(中学三年)が立っている。春子(高校二年)が出てくる。

春子 あと附けたでしょう。

保男 附けてないよ。

春子 だいぶ前よ。でも、もうどうでもいいわ。そんな事。ここ私の家。

保男 知ってるけど。

春子 本当はね、もう私の家じゃないんだ。入口も閉められてるし、(家を見上げて) 何、あの張り紙。

保男 (見上げて) 「金かえせ、どろぼう!」

春子 「娘売って、借金返せ」。娘って私じゃない。訴えるわよ。警察に。

保男

春子 今日は花火、やってないかな。

保男 やってないよ。

春子 どうして。

保男 だって、冬じゃないか。

春子 そうだよな。それに夜逃げに花火はおかしいか。明るいと困るもんね。逃げる時。

保男

春子 何しにきたの。夜逃げの手伝いに来てくれた？

保男 最近、電車で見かけないから。

春子 学校、行ってないからね。今日、久しぶりに帰ってきたのよ。今まであっちこっち、みんなで逃げ回っていたの。借金取りとか債権者とか。

保男 ここで立っていたら、あいつらの行き先知らないかって、あいつらだろ。

春子 あいつらって、あいつらこそあいつらじゃない。

春子が保男に向き直って。

春子 君、まだやってるの。ほら、あれ「次は橋本！」。

保男 やってない。

春子 ウソ、私たちね。君のこと電車男って言ったのよ。最低だって。でも私にはわかってた。

保男 何が。

春子 君、いじめられてるでしょう。

保男 わからない。でも、そうかもしれない。

春子 私も中学の時いじめられてたからね。君たち見てるとわかったわ。でも、もうやめなさいよ、あんなこと。

保男 あれ、やった日はいじめられないんだ。

春子 自分が惨めになるだけじゃない。電車の中であんな恥ずかしいこと、私だって最低だと思ってた。

保男 みんなそうだよ。だけど僕は分かったんだ。あれをやってる時、誰も僕のことなんか気にしてないって。だからそれからは平気になった。

春子 でも、あれをやってる時の君って、何だか私には優しい目をしているんだ。まるで、うさぎのような優しい目。

保男 それで、この前あんなことを。

春子 君に突然「橋本には何時に着くんですか」って言ったこと。ごめんね。あんなおかしなこと言って。

保男 まさか僕に声をかけてくれる人がいるなんて思ってもみなかったから、びっくりした。

春子 あの日、私は普通じゃなかったのよ。もうつらいことばかりで。あの前の日よ、家にいるんな人がやって

きて、もう家の中めちやくちや。そんな時、君をみたら何かしてあげたいって気持ちになっちゃってしまっただ。たぶん同じようにつらいんだから優しくしてあげたいって思ったのかも知れない。

保男　でも、僕は嬉しかった。

溶暗。

再び明かりが入ると元の列車内。春子と保男が向かい合わせに座っている。

春子　（笑いながら）でも可笑しいわね。ちゃんと中学校の時してたこと、役にたったじゃない。

保男　あれから、夜逃げの後、どうしてたんですか。

春子　夜逃げの後、何とか私たち大阪でね、小さな家を借りて。私、夜間高校に行ったのよ、大阪で。でもそこで知り合った人と東京に行って、いろいろなこととして働いて、だから少し休憩しようと思って、一人で。

保男　そうだったんですか。

春子　保男君は。あれからは少しは強くなれた。

保男　僕は……。僕はあの日からは。自分よりもっとつらい人がいるんだと分かって。

春子　そう、あの時の私たち、お互いに自分を見ていたのかもしれないわね。ほら、人よりつらいことが沢山ある人は、人よりも沢山やさしくなれるって、誰かがいってたじゃない。

保男　19時45分ですよ。もうすぐ。

春子　え、？

保男　さつき彼が言ったでしよう。橋本に着く時間。

春子　そうだったわね。それに、確かあの時、保男君が答えてくれたのも同じ時間じゃなかった。

保男　そう、あれから一度も変わってないんですよ。この電車の時間。

春子が降りる支度をしてドアに向かう。

春子　車掌さん。アナウンスはしなくていいの。

保男　（暫く春子を見つめているが）もうすぐ「幸福、幸福」です。降りる方はお忘れものがないように支度してください。

（幕）

